

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

「平成7年度(第81回)全国図書館大会」に参加して

松原 修

今年度の全国図書館大会は、新潟県において10月25日(水)～27日(金)の日程で開催された。

私自身は2日目の第14分科会(図書館利用教育)の事例報告者として、参加を依頼されたため、分科会の報告のみにとどまってしまうことをまずご了承ください。

分科会のテーマは「利用者の自立をいかに支援するかーガイドラインから実践へ」であり、まずそのシンポジウムとして「利用の達人、おおいに語る！」と題し、『別冊宝島』で「図書館をしゃぶりつくせ！」を編集した坪井賢一氏、成蹊大学の佐藤バーバラ先生、早稲田大学図書館長の岡澤憲美先生をパネラーとして、あくまで利用者の立場から図書館への注文、期待を提起して頂いた。

坪井氏は、公共図書館に対する不満(?)を主にあげ、検索システムの機能の低さと没個性な図書館が多いことに注文をつけておられた(たとえばAND、NOT、OR検索ができないことや郷土資料室が生かし切れていないことなど)。

佐藤氏は、大学図書館に対する不満(?)として、規則に縛られ、ユーザーフレンドリーでないことの事例をあげて、図書館の規制緩和の必要性を訴えておられた。

岡澤氏は、使いやすい図書館は概してサービス産業であることを自覚している図書館であることをまず最初にあげ、社会的ニーズにあったもの、すなわち必要なものがそこにあるということが図書館としての前提条件であるとし、図書館員に地球社会がどちらに向いているのかをよく知って欲しいと注文をつけられた。社会的な情勢として、①労働時間の短縮、余暇時間の増加、②離婚が社会的に認知され、女性の方が寿命が長いため、女性のシングルライフが長くなる、③高齢化・少産化にともなって労働力が絶対的に不足し、女性労働者(キャリア女性)、外国人労働者が増加する、④少産化による長男・長女社会の到来、などをあげ、これらの将来的な動向に図書館がどのように応えてゆくのかを準備していく必要

目次	<p>平成7年度全国図書館大会に参加して —感想及び資料—(松原修)……1頁 5支部合同新春例会のご案内……………8頁</p> <p>支部報へのご意見は編集部またはお近くの支部委員まで</p>
-----------	--

があると提起された。その中でも労働時間の短縮、余暇時間の増加からカルチャーセンターとしての役割、高齢化によるミーティングスポットとしての役割、国際化による開かれた図書館のあり方を追及して行くことが重要であると強調された。また、低成長が続くと必ず文化事業がリストラの対象となり、図書館が一番危ういということを示唆し、とにかくユーザーを“人質”にとることの重要性を訴えておられた。

事例報告は各館種から4本が用意された。①公共図書館からは「図書館ウォッチング—新中学生対象図書館利用ガイダンスを実施して」と題して、大阪府立夕陽丘図書館の脇谷邦子氏から新中学生が児童室から一般室にスムーズに移行できるようガイダンスを行ったことの実例報告がなされた。②学校図書館からは「利用指導のスタートラインに立って」と題し、淑徳与野高等学校の東川久美子氏から学校が生徒の主體的な研究活動を教育に取り入れるようになってから図書館利用が急増し、それに対応するために手作りの利用指導を試みた事例の報告が行われた。③大学図書館からは「大学図書館における利用者教育」と題して私が、立命館大学における様々なガイダンスの取り組みを報告した（詳細については別紙参照）。④専門図書館からは「利用教育の原点と変移」と題して野村総合研究所の井上信氏から新人教育と「電子図書館化」に伴うリモート教育の実例報告がなされた。

また、この分科会のなかで図書館雑誌の10月号に掲載されているガイドラインの説明があり（この分科会は、JLAの図書館利用教育委員会で現在論議中であるこのガイドラインを後押しする目的もあると思うが、．．?）、とりわけ公共図書館では“教育”という言葉にアレルギーがあったようだが、事例報告や意見交換が行われていくうちに、利用教育のイメージや大切さを共有することができたようで、分科会としては成功のうちに終わった。
(まつばら・おさむ/立命館大学メディアセンター)

(以下、報告資料)

大学図書館における利用者教育

— 立命館大学を一例として —

第81回全国図書館大会・第14分科会
立命館大学メディアセンター 松原 修

はじめに

大学図書館における利用者教育は、教学との関わりが大変深く、学生が自ら学ぶ主体として成長するために極めて重要なものである。

利用者教育といった場合、どうしても新入生を対象としたオリエンテーションをイメージしがちであるが、利用者のニーズや発達段階に応じたきめ細かな利用者教育を行うことが重要である。

また、情報化社会の進展によって情報媒体が多様化し、マルチメディア化が進む中で、近年、大学教育における「情報リテラシー」の涵養が重要視されてきている。このような状況のもとで学生が様々なツールを使いこなす、情報を収集、整理、加工し、自ら情報として発信しうる能力を身につけさせることに関して、図書館がどのような役割を果たしてゆくのかは大きな課題である。

立命館大学における利用者教育は、まだまだ充分に行われているとはいえず、とりわけ後段の部分については現在模索中という状況ではあるが、私立大学の一例としての取り組みを報告させて頂きたいと思う。

1. 図書館新入生ガイダンス

立命館大学における図書館新入生ガイダンスの位置付けは、大学における教育・研究の充実・発展にとって図書館利用の高まりが不可欠であるという教学上の要請に対して、図書館として積極的に応えるべく実施されるものであり、図書館の全館体制で取り組むべき重要な課題である。

1) 歴史的経過

① 1980年代前半

- ・会場 図書館の閲覧室の一部を利用
- ・時間帯 語学の授業時間を利用
- ・方法 スライドの上映（テープによるナレーション付き）と口頭での補足説明
- ・規模 2クラス

この方式の問題点としては、実施規模が小さいため、5月の中旬～下旬ぐらいまでかかり時期を逸する感がある。また、語学のクラスであるため、非常勤の先生の受け持つクラスは引率が徹底されないこともあり、出席率が悪い場合が多かった。

② 1980年代後半

図書館新入生ガイダンスの出席率を上げるため、このガイダンスはあくまで教員が主体となって行うものであり、それに対して図書館員が積極的に支援するものであるということを改めて認識して頂くために、教学機関を通して全学部の教授会に論議を依頼した。その結果、語学の授業時間から小集団教育（プロゼミ）の授業時間での実施となり、教員の引率が徹底されるようになった。

また、新入生ガイダンスをタイムリーなものとするために短期間に実施することを大きな目標として掲げた。

- ・会場 大教室
- ・時間帯 小集団（プロゼミ）の授業時間を利用
- ・方法 ビデオの上映と口頭での補足説明
- ・規模 4～6クラス

小集団授業で実施したため、教員の引率が徹底され出席率が上昇した。ただし、この方式の最大の問題点は、大教室で実施するため図書館見学が実施できないことであった。

③ 1990年代前半から現在まで

図書館新入生ガイダンスの主目的を図書館見学（ツアー）に置いたことが大きな変更点である。そのため、まず、大学全体の「学生生活ガイダンス」で図書館の簡単な説明を行い、その内容をさらに充実したものととして図書館新入生ガイダンスを位置づけた。

また、これまでは1時限（1時間30分）のうちの約40分の時間を利用した図書館のみのガイダンスであったものを国際平和ミュージアムの見学も兼ねて1時限すべての時間を利用したものとした。

- ・会場 図書館と国際平和ミュージアム
- ・時間帯 小集団（プロゼミ）の授業時間を利用
- ・方法 図書館見学およびビデオの上映と口頭での補足説明
- ・規模 学部のクラスを4分割した規模（4～7クラス）

この方式で実施することによる最大の効果は、ガイダンスの内容が図書館を実際に見学することによって実感できることである。また、4月は時期的に大教室を確保するのは困難であり、事務の煩雑さが解消された。

問題点としては、1回の実施規模が大きいためきめ細やかな対応ができにくいことがあげられる。

※'95年度図書館新入生ガイダンス各学部出席状況

学 部	出席者数	学生数	出席率	前年比
法学部	672	809	83.1%	△ 9.1%
経済学部	806	822	98.0%	△ 2.1%
経営学部	741	775	96.0%	△12.5%
産業社会学部	769	926	83.0%	▼ 7.2%
国際関係学部	230	249	92.4%	△ 1.9%
文学部	842	866	97.2%	△ 1.3%
政策科学部	301	359	84.0%	△ 4.2%
二部全体	416	488	85.2%	△13.4%
合 計	4,777	5,294	90.2%	△ 4.1%

2) 新入生を対象としたオリエンテーションの位置付け

新入生を対象としたオリエンテーションは、中学・高校までの学習スタイルとの変化により、図書館の役割が重要となるなかで、図書館利用の動機付けとして極めて重要である。

このオリエンテーションで、図書館利用のすべての部分を紹介するのは合理的かつ効果的ではなく、あくまで導入部分として絞り込んだものとすべきであり、これを受けて授業において実際に文献にあたるような仕掛けをつくる必要がある。また、希望者だけではなく新入生全員に対して図書館見学を行うことは、時期的にも極めて重要であると思う。

そして、このオリエンテーションは最小限のものであるため、利用者のニーズや発達段階に応じた多様な利用者教育の展開が必要である。

2. RUNNERS (立命館大学学術情報システム) 講習会

OPACの講習会を通年で実施

'94年 4月15日～ 7月 5日 (前期)	延べ12回開催、83名参加
'94年10月 3日～12月 9日 (後期)	延べ10回開催、36名参加
'95年 4月12日～ 7月 5日 (前期)	延べ13回開催、81名参加

3. ステップアップセミナー (3・4 年生ゼミ対象)

一般的にゼミガイダンスと呼ばれているもので、学生が自らテーマを設定して、研究に取り組むにあたって、図書館をいかに活用できるのかという方法論をツールの紹介を中心にゼミごとのテーマに沿って実施するものである。いわゆる「Bibliographic instruction」の範疇に入るものであろう。

1) 実施方法

3・4 年生ゼミを対象とし、教員からの要請による申し込み制

2) セミナーの内容

高年生ゼミでの学習・研究を行ってゆく上で、必要な文献の検索方法について学部単位で共通して必要なものを紹介し、各ゼミの個別のテーマに応じた内容を取り入れる。また、詳細な内容については、セミナーの実施前に担当教員と打ち合わせを行い、教員から要請があれば適宜、追加・修正をする。

3) 実施状況

・ 94年度

・ 94年6月2日～9月26日	延べ27件、225名参加
-----------------	--------------

・ 95年度

実施日	学部	ゼミ名
4/14	経営	服部クラス (経営データ分析入門)
4/21	経営	服部クラス (経営データ分析入門)
4/27	法	山本ゼミ
5/12	法	長クラス (留学生)
5/12	経営	服部クラス (経営データ分析入門)
5/19	経営	安藤クラス (経営データ分析入門)
5/22	法	長クラス (留学生)
5/26	経営	安藤クラス (経営データ分析入門)
5/26	産社	小澤研究室 (大学院M1)
6/7	文	ウエルズゼミ
6/12	文	マクレーンゼミ
6/26	文	ウエルズゼミ
6/27	文	ウエルズゼミ
7/3	経営	原ゼミ
7/6	経営	原ゼミ
7/7	経営	安藤クラス (基礎演習)
9/21	文	中原ゼミ (英米文学)
9/22	国際	板木ゼミ
9/27	経営	長島ゼミ
9/28	国際	杉原ゼミ
10/2	経営	橋本ゼミ
10/3	国際	姫岡ゼミ

10 / 5	産社	山田ゼミ
10 / 9	文	星野ゼミ
	産社	高原ゼミ
10 / 23	法	長クラス (留学生)
	法	長クラス (留学生)
11 / 20	文	永原ゼミ (英米文学)

4. その他の利用者教育 ('94年度実施分)

時 期	内容と参加人数
4 月	「UBC参加者のための語学学習ガイダンス」 4/16 21名 4/21 19名 4/23 25名
5 月	「大学院生(新入生対象)向けRUNNERS講習会」 5/17 6名 5/26 16名
6 月	「アメリカン・リサーチ参加者のための語学学習ガイダンス」 6/7 14名
7 月	「試験に役に立つ資料の探し方講座」 7/5 4名 7/6 4名 「編入生のための図書館ガイダンス」 7/5 5名
9 月	「短期留学生(新入生)のための図書館ガイダンス」 15名 「NACISIS-IR講習会(教員対象)」 9/21 7名
10 月	「海外セミナー参加者のための図書館ガイダンス」 10/8(木) 30名 10/15(月) 13名 10/22(水) 16名 10/29(水) 16名 「卒論・レポートのための資料の探し方講座」 10/19(雑誌・新聞記事) 5名 10/21(図書雑誌の探し方) 6名 「大学院生向けRUNNERS(CD-ROM、NACISIS-IRを含む)講習会」 10/24 6名
11 月	「卒論・レポートのための資料の探し方講座」 11/1(図書・雑誌の探し方) 4名 11/28(雑誌・新聞記事) 6名 「図書館でできる業界・企業研究講座」 11/14 120名 11/15 130名 「NACISIS-IR講習会(教員・院生対象)」 11/18 33名
12 月	「卒論・レポートのための資料の探し方講座」 12/13(CD-ROM) 3名

5. メディアセンターにおける利用者教育

メディアセンターでは、利用対象は理工学部のみであり、専任体制が3人ということもあり、衣笠の図書館に比べ十分な利用者教育ができていないのが現状である。

1) 新入生オリエンテーション

大学の履修登録の説明時にメディアセンターとネットワーク関連の部署のガイダンスを行っている。

2) RUNNERS、CD-ROM (INSPEC) 講習会

講習会名		学部学生	大学院生	教員	合計
RUNNERS講習会	入門編	18	2	2	22
	応用編	2	4	1	7
	総合編	2	1	5	8
	合計	22	7	8	37
INSPEC講習会	入門編	5	1	1	7
	応用編	1	1	1	3
	総合編		1	2	3
	合計	6	3	4	13
総合計		28	10	12	50

※ RUNNERS講習会 延べ12回、INSPEC講習会 延べ6回

3) メディアセンターの課題

文献利用教育(bibliographic instruction)の実施を図書館と協力しながらいかに実施して行くのかが大きな課題である。

6. システムを利用した図書館案内

1) パソコンによる図書館案内 (LEAD)

①目的

学生を対象として、パソコンを利用して図書館の利用方法を簡単に楽しく理解してもらうことを第一目標とした。また、これに付随するものとして公共機関案内や図書館ニュースなどの情報を載せた。加えて、レファレンスカウンターにおける参考業務のうちクイックレファレンスをできる限り少なくし、事項調査などインタビュー

が必要なものに時間を費やせようにしたという目的で開発した。

②概要

「インフォメーションカウンター」

インフォメーションカウンターにおける図書の貸出・返却・予約といった様々なサービスを紹介し利用方法を案内する。

「レファレンスカウンター」

レファレンスカウンターにおける参考質問の受付、相互利用サービス、外部オンラインデータベース・CD-ROMの利用方法など、様々なサービスを紹介し、利用方法を案内する。

「図書／雑誌の探し方」

初めて学術情報システム（RUNNERS）を使う人を対象に、RUNNERSの利用方法を案内する。

「図書館ニュース」

今、どんな本が一番読まれているかなどを紹介する「図書館なんでもベスト10」や講習会・展示会に関する情報、開館日程や投書「Q&A」も案内している。

「公共機関案内」

近郊の公共図書館や専門情報機関などを案内する。

「書架情報」

自分のテーマに該当する書架の位置、各コーナーやカウンターの位置をフロアレイアウト上に案内する。

2) WWW (World Wide Web) による図書館案内

「LEAD」をベースにしてインターネットで図書館案内を行う。

7. 利用者教育における新しい課題

近年、情報分野における技術革新の進展にともなって、大学図書館を巡る環境も大きく変化しつつある。図書館が情報を収集、整理、保存、提供する役割を担うのは、今も昔も変わるところではないだろう。ただ、媒体やツール自体が多様化してきているだけであり、「マルチメディア時代」のなかで、図書館だけが刊本に固執するのは時代から取り残されてしまうことになるだろう。

とりわけ、最近なにかと話題になっているインターネットや電子メール、NetNewsなどの新しい情報源を如何に取り込み、利用者教育を実施して行くのかは、大学図書館が直面する新しい課題であるように思う。

メディアセンターはマルチメディア化に対応した新しい図書館を模索してオープンしたわけであるがメディアセンターが主体となった利用者教育は残念ながら行われていないのが実情である。これらのことに関しては、ネットワークの関連部署がガイダンスを行っており、さらには情報処理演習という必須の授業があるため、学生は躊躇することなしにこれらのツールを使いこなしている。

しかしながら、図書館独自のアプローチの方法も考えることができるのであり、たとえばインターネットを通して提供されている他大学のOPACや図書の新刊情報、雑誌のコンテンツ情報などの利用方法を紹介することなども考えて行かなければならないだろう。（図書館ではネットワーク関連の部署と共催で、OCLC、UNC OVER、TELNET検索、WWWなどの利用者教育を10月から行う予定である。）

おわりに

大学図書館における利用者教育は、とりわけ教学とのかかわりが非常に深く、授業と関連させた仕掛けをつくる（たとえばシラバスや授業での参考文献の紹介、二次資料を利用した文献探索課題の出題など）ことが極めて重要であり、利用者ニーズに対応した（ニーズの先取りも含めて）様々な形で積極的に実施するのが基本であるように思う。そのためには、大学の教育・研究の発展において図書館の役割が極めて重要であるというコンセンサスを形成することが極めて重要である。

利用者教育は、すべての図書館サービスと連動するものであり、より高度なサービスを展開する原動力となるという点において、図書館サービスの原点であるように思う。大学図書館における利用者教育をさらに発展させるならば、一部の医学図書館に見られるようなカリキュラムに組み込まれた形も模索して行く必要があるのではないだろうか。

* 全国大会では実際にガイダンスで使った資料やマニュアル等を配布しましたが、支部報では発表した基本レジュメだけを掲載させて頂きました。

大学図書館問題研究会 ◆ 近畿5支部合同新春例会

「大学図書館の現状と未来像」

日頃日常業務に埋没しがちな皆さん、時には「思索」「充電」も必要です。昔から「一年の計は元旦にあり」なんてよく言われますが、そういえば新春早々に大図研の行事があったなあ……というわけで、5支部合同でお届けするお正月企画は皆さんの頭をリフレッシュするお手伝いを致します。「大学図書館の現状と未来像」と銘打ち、国公私大からパネラーをお招きして図書館の将来像を大いに語って頂きます。活発なバトルが繰り広げられることは必至。第2ラウンドの懇親会では、人前で意見を述べるのが苦手なあなたが今度は主役。隣の仲間と情報交換して飲み食い以上に元をとってしまいましょう。まいどためになる大図研の企画、お正月でキリもいいし、このさい参加してみてはいかがかな？

1996年1月27日(土) 15:00~17:00

於 京大会館

(京大職員会館と
お間違えなき様)

-----【京大会館】-----

京都市左京区吉田河原町15-9 ☎075-751-8311

- JR京都駅→市バス(206)系統(A20のりば) 東一条下車
- 四条京阪(南側)→市バス(201)(31)系統 東一条下車
- 三条京阪南口→京都バス(出町柳)系統(5番のりば) 荒神橋下車
- 京阪鴨東線丸太町駅下車徒歩約10分

★ 懇親会 ♥

門・Gate (予定)

17:30~

会費：4~5千円程度

∴ 当日会場にてお申し込み下さい